

# 人肌の時間、人肌の空間、そして人

## — 私たちのひだまり文庫 —

松岡 文子  
菊地 知子

### ポストの手紙

新年度の準備や旧年度の片づけに明け暮れて過ごす私たち二人あてに、切手のない手紙が届いたのは、三月末。差出人は、上の子が一歳になる前から「ひだまり」に来ていた、二人の男の子のお母さんである。家庭文庫という名目で、私たちは、わずかながらの時間と場所を確保し、隔週で続けてきた「ひだまり」を、二〇〇六年の春から、しばらくお休みすることにした。そしてそれを告げたことで、図らずも、子どもを連れて通ってくれ

た人たちの「ひだまり」に対する思いを知ることになった。

先の手紙に、私たちの今後へのエールとともにつづられていたのは、「ひだまり」がいつも温かい場所であったこと、「知子先生、文子先生」に会えることがいつも楽しみだったこと、子どもにも大人にも、いい出会いがたくさんあったこと、などであった。時を同じくして、「楽しくって、おいしくって、あったかくて、そして心強かったです！」というメールも別の人から受け取った。私たちの思いは届いていたのだな、とうれしかった。

## ある日の「ひだまり」

自宅に人を迎える日は、朝から気ぜわしい。築三十年に近い、汚れることに不寛容にならずに済むありがたいこの家は、玄関から続く廊下の先に和室があり、その先には障子を隔てて、日中よく陽のあたる広縁がある。和室の隣りは、ふすまを隔ててリビングである。ひだまりのある日には、障子をすべて取り払い、ふすまを開け放つて、広縁と和室、リビングを続き間にする。冬なら和室に大きめのこたつをかける。楽しみにしていたのに急病などで来ることができないといった連絡も、この時間にもらうことが多い。家での子どもの様子を尋ねるうち、勢い長い電話になることもままある。

慌しく掃除機をかけ終わるか終わらぬころに、焼きたての天然酵母のパンを持って、文子先生ことやちゃんが見れる。玄関先にいすを出し、「ひだまりぶんこ」と描かれた木製のプレートを、大小のクマのぬいぐるみに持たせるように置く。親子連れ（主に母子。時に、おば

あちゃんと子ども。まれに父親の参加もあった）が来るまでのわずかなひととき、お茶とおやつの準備、来る人の確認、大まかな流れを確認しながら、会えずに過ごした数日の穴を埋めるように、寸暇を惜しんで二人でおしゃべりをする。

予定の十時半に次々と親子連れがやってくる。この日連絡があつたのは十組。うち一組が発熱で来ることができないので、都合九組の参加である。ほかでもないその子を、ほかでもない私たちが待っている、というニュアンスを大切にすべく、その日に来る人にはあらかじめ連絡をもらっている。きょうだいで参加もあるので、部屋は、にわか二十人以上の人が所狭しと居合わせる場所になる。子どもたちに、おひさま形の手製の名札を着ける。子どもは思い思いに遊び始め、親たちはその姿を見守りながら、おしゃべりに花を咲かせたり、我が子に限らず子どもからねだられて、絵本を読んだり、ままごとのごちそうを食べたりしている。

全員がそろったら、遊びの様子を見て「そろそろおは

なし始めるね」と声をかけ、ある子は大人のひざの上  
に、ある子は布の敷物の上に座って、手遊びを楽しみ、  
絵本や紙芝居の世界に浸る。「おもしろいね」「ふしぎだ  
ね」という思いで子どもが後ろの大人を振り返った時  
に、振り返った気持ちを受け止められるように、「子ど  
もが見ているものを大人も一緒に楽しんでください  
ね」と時折お願いしている。

雨上がりで、地面の状態が気になりつつも、「行きま  
しょうよ」と言ってくれるお母さんのひとことで、庭か  
ら続く広場へ、十二畳の特大ブルーシートを持って繰り  
出す。今日のおやつは、みかんゼリーと六穀パン。ハブ茶  
のポットとともに、お母さんたちにも手伝ってもらって  
運ぶ。外で食べると本当においしい。こんなふうに関  
持つてパンにパクつくのは初めて、という一歳の子もい  
る。草の茂みでは大きなバッタを発見し、チョウチョウ  
もたくさん飛んでいる。捕まえようとしていたり、追いかけ  
て走ったり、あまりに楽しく、またのどかで、今後も可  
能な限りお外に出るのもいいね、と二人で話す。

予定の十二時は今日も過ぎてしまった。室内に戻って  
名札を返してもらい、おやつや材料費の五百円を集め  
る。玄関までの見送りでは、別れを惜しむにはお互いに  
不十分で、私たちは道まで出て、一人ひとりが道の先に  
見えなくなるまで手を振り、声をかけ続ける。

時流への穏やかなアンチテーゼとして

く知子のまなざし

東京の見知らぬ土地の小さな社宅で、私たちは子育て  
期を過ごした。子育ては、子どもが刻一刻命を承らえて  
いくその隣で、明らかに今を未来へとつないでいく営み  
でありながら、ともすると、無事に育てて当たり前もし  
くは当然以下に成り下がる。それは、育児がいわゆる無  
賃金労働であること、およびそれに対する社会のとらえ  
方とも無関係ではないかもしれない。「こんな割に合わ  
ないことをするくらいなら、預けてパートに出るほうが  
マシ」と、子育ての当事者の母親が言うのを、幾度とな  
く耳にした。

けれど、日々子どもを支えて生きる人は必須だし、そこを担おうというのなら、担い手はもつと誇りをもっていいはずだ。それを励まし、共に楽しんでいく場をつくらう、と思った。大人が子どもと離れて自由になる時間を確保することも時に大切かもしれないけれど、私たちの思いはそこにはなかった。子どもはたっぷり一年かけてようやく一つだけ年を取るのだから、時間と労力がかかることを、できれば避けたい嫌な仕事ととらえずに、誇りをもって子育てができるように、その傍らで励ませたいと思つた。本当にささやかな場ではあつたが、子どもも大人も、自分に安心し、人に安心し、何だか明日も楽しみだ、と思える気持ちを、支えることもあつたように思う。

支え支えられる関係を生きる　　く文字のまなざし

私たちの「ひだまり文庫」を語るとすると、どうしても、自身の子育て期から、ということになってしまふ。連日紙面をにぎわす、親子心中やら、虐待やらを、どう

しても別の世界とは思えない自分がいる。危ない橋を渡ってきた、という思いがある。私の子育て中の状況下——二十五歳で母親になり、実家は遠く、夫は忙しく——で、曲がりなりにも母親をやつてこられたのは、子育てで時期の友人たちのおかげ、と言いつけることができる。日々の暮らしの中で、子どもたちとの時間を共有してくれる、一緒に笑つて、泣いて、怒つてくれる、そのことに、どれだけ救われたことだろう。今振り返ると、それがどんなに恵まれた、どんなにかかけがえのないことであつたか、思い知らされるのである。

文庫を一緒にやらない？ と声をかけてくれた「知子先生」は子育て期の私の無二の親友である。最近改めて思うことは、「この人、変わつてないな」ということである。一緒に子育てをしてきた時から、ぶれることなく、一貫して、子どもの側にいた人だつた。「遊びの天才」と仲



間内では言われていたが、子どもの気持ちを感じ取り、寄り添うことがうまいのである。「知子先生」が思いついた、段ボールの家やら、キッチンペーパーの雪遊び、水のプールや落ち葉のプールは、どれだけ文庫の子どもたちを夢中にさせたことだろう。そして、子どもたちが夢中で遊ぶ姿を見るお母さんたちの幸せそうな顔。自然と弾む親同士の会話。確かな手応えに、ともちゃんと私は目を見合わせ、「よかつたね」とうなずき合う。

「私たちと同じように、子育てを楽しいと感じ、つらさや切なさも含めた子育て中の思いを共有する母親同士の場合にしたい」。文庫を始めた時に、ともちゃんが言った言葉だ。「(子どもを預かって子育ての息抜きをしてもらうといったような) いわゆる子育て支援じゃない、子どもと一緒にいることが楽しい、簡単便利で面倒がないことだけがいいことじゃない、と思える仲間を増やしたい」と熱く語ってくれていたのだが、最近になって、それがどんなに的を射た、大事なことであるか私にもわかってきた。代表のお母さんが、子どもたちを預かって

文庫に来ることがあり、文庫の真意をやりわりと伝えるという苦勞もあつたけれど、不思議なことに、ちゃんと私たちの気持ちは伝わり、子育て時代の今を大切にしよう、楽しもう、というお母さんが集まってきてくれた。

夢中で過ごした文庫の日々であったが、いつも実感していたのは、支えているつもりなのに私たちが、同時に文庫のお母さんや、子どもたちに支えてもらっていたということ。私は、ともちゃんのご指名で、おやつのパン作り担当であつたが、「おいしいっ！」と食べてくれる子どもたちや「うちの子、先生のパンが大好きなんですよ」と言ってくれるお母さんにどんなに励まされ、どんなに充実感を味わつたことか。食べることは即、次の活動の力になる。「一緒に食べるとおいしいね」と言い合いながら、前向きな気持ちを育てる手伝いもできたように思う。

天然酵母は発酵に時間がかかり、前日から仕込み、夜朝ご飯を作る傍らで、パンが仕上がっていくさまを見て、息子たちが「きょう、ひだまりなの？」と声をかけ

てくれるのもうれしかった。思春期に差しかかった子どもに、「ひだまり」をやっていることが、私なりのメッセージになっていたかもしれない。支え、支えられる環境だからこそ、続けてこられたのだと思う。

そして、ちゃんと未来の種まきもしたんだよね。そう、文庫のお母さんたちの中には、いずれ、「ひだまり」みたいな場をつくってくれそうな人がいるのだ。そして、一人ひとりのお母さんたちも、ほわっと温かい人として、小さな「ひだまり」を日々つくってくれているはず。ともちゃんが願っていた「子育てを楽しむ」という想いは、きつとつながっていく、と私は確信している。

### 子どもの生きる場所が居場所であるために

人の生きる場所、とりわけ、子どもの育つ場所は、暖かく、かつ温かいものでなければならぬと思う。人がわが身の体温を三十六度くらいに保つ生き物で、体温くらいに気温が高いと、たちまちへたばってしまうし、零下の地では、十分な暖を取り、体温を保たなければ、や

はり生きられない。けだし、粗末にしない、大切にすることを、ということも同義であるところの「保つ」、ということも、意外になすに難しい。日常ひんやり冷たくても、祝祭的にその一瞬熱くなることは、割とやりやすい。人が、何か有効なコミュニケーション方法を考える時に、イベントに走りがちなのは、日常の冷たさとの対比で、熱いことが非常に効果的に何かを変えうるように思えるからだと思う。保つことには、まったく違う種類のエネルギーが必要で、それはおそらく人海戦術とでも呼ぶべきたぐいのことなのではないか。子どもを取り巻く社会の電圧はしかし、程よい温度設定をあまり得意とほしくないようだ。

この世にやってきてまだ日の浅い子どもにはとりわけ、加熱も冷却も酷なことである。子どもと、その傍らの大人たちがぬくもりを保って過ごせるように、人肌の温かさをもつ人間こそが、緩やかにつながって、緩やかに子どもを包圍していなければならない、そんな気がしている。